

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18720005

研究課題名(和文) クールノー科学認識論の総合的解明

研究課題名(英文) Analysis of the scientific epistemology of A. A. Cournot

研究代表者

村松 正隆 (MURAMATSU MASATAKA)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：70348168

研究成果の概要：

本研究は、19 世紀のフランスの科学哲学者クールノーの科学哲学の全貌を描き出すことを目的としたものである。そのために、ほぼ彼と同時代に生きつつ彼とは異なった科学哲学を築き上げ、実証哲学の祖となったオーギュスト・コントの科学哲学との比較を出発点に研究を行い、しかる後に、同時代の科学的知見をクールノーがいかにか吸収して自らの科学哲学を構築したかを研究した。こうした手法を通じて、クールノーの科学認識論の前提となる合理主義的な世界観を素描すると同時に、特に彼の「偶然」の哲学、ならびに「偶然」を扱う確率の哲学を素描した。また「偶然」を認める彼の哲学が、独自の生命哲学、社会哲学を可能にしたこと、ならびにその形成過程における論理展開を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 500,000   | 0       | 500,000   |
| 2007 年度 | 600,000   | 0       | 600,000   |
| 2008 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 1,600,000 | 150,000 | 1,750,000 |

研究分野：フランス哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：クールノー、フランス・エピステモロジー、実証主義、確率論、オーギュスト・コント、メヌ・ド・ビラン

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始時まで、研究代表者は 19 世紀フランス哲学を、メヌ・ド・ビランに起源を持つフランス・スピリチュアリズムとオーギュスト・コントを創始者とする実証主義の対立の中で統一的に把握することを目指していた。こうした意識の中で、これらの哲学的

傾向が発生するに至った社会的起源、ならびに両者が理想とする社会像とその実現のための手段などを主たる対象として研究を進めていたが、同時に研究代表者はまた、これらの哲学が内包する科学論にも興味を持つに至っていた。すなわち、これらの哲学的傾向を支える実証的な科学的知見がいかなる

ものであるのかを明らかにする必要があるためである。そのため研究代表者は、メーヌ・ド・ビランならびにオーギュスト・コントの科学哲学を、特に生物学、医学を中心に明らかにするという方向で研究を進めていた。そのなかで、次第にいわゆるフランス・エピステモロジーの重要性が痛感されるようになる一方、コントの一代後の代表的なフランスのオーギュスタン・クールノーに対して、経済学以外の領域からは十分な注意が払われていないことに注目し、彼の科学認識論の総合的解明の必要性を痛感し、本研究を組織するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、オーギュスタン・クールノーの科学哲学の全体像の解明を目指すものであった。

(2) そのためにはまず、批判的合理主義者としてのクールノーの姿を明らかにし、彼の哲学の認識論上の前提を明らかにすることを目的とした。

(3) その上で、メーヌ・ド・ビラン、オーギュスト・コントとの対比の中で特に彼の生物学の哲学の特徴を明らかにすることを目指した。これは、当時最先端の科学であった生物学に対する応接の違いが、それぞれの哲学者の特徴を明らかにすると考えたからである。

(4) 続いて彼の数学論と、それを基盤とした確率の哲学の全体像を描き出すことを目的とした。ついで「偶然」の実在性を認める彼の存在論が、彼のエピステモロジーにいかなる影響を与えるのかを、特にその社会論と自然哲学において明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 研究の方法については、まず当然のことながら、クールノー自身のテキストの内在的読解に取り組んだ。もっとも、膨大なクールノーの著作を明らかにするためには、先行研究の参照が当然ながら必要となった。その中で、彼の哲学の全体像を明らかにするためには特に、Bertrand Sain-Sernin による、“Cournot” (1998) を参照し、また彼の偶然の哲学を理解するためには、Thierry Martin の “Probabilités et critique philosophique selon Cournot” (1996) を参照した。また、彼の科学認識論の形成、特にその数学的手法の社会科学への転用を理解す

るためには、François Vatin の “Economie politique et économie naturelle chez Antoine –Augustin Cournot” (1998) が極めて有効であった。

(2) クールノーの哲学についてある程度の知見が出揃った後は、彼より僅かながら年長で、独特の科学哲学を築き上げ、実証主義の祖となったコント (Auguste Comte) との比較研究を行った。クールノーと比して格段に研究が進んでいるコントの科学哲学と個々の論点について比較することは、クールノーの科学哲学の特徴を明らかにするために有効な手法と考えたからである。特に両者の認識論的前提、学問階層の設定方法、生物学の位置づけ、ならびに偶然の実在性を巡る議論と確率論の位置づけを巡って、両者の比較対照を重点的に行った。

(3) また、フランス・スピリチュアリズムの祖とされるメーヌ・ド・ビランとの比較研究も行った。すなわち、クールノーの哲学のうちには、単なる現象主義にとどまることなく、科学的カテゴリーの心理的起源を探究する傾向があるが、こうした傾向はまさにメーヌ・ド・ビランを祖とするものである。こうした点に着目することは、19世紀フランス哲学研究においてしばしば設定される「スピリチュアリズム vs. 実証主義」という図式を乗り越え、また科学 vs. 反科学という図式の中で哲学を解釈する危険を逃れるものであると考えたからである。

(4) 確率論史ならびに統計学史の中でクールノー哲学の特質に注目することにも意を払った。クールノーがその科学認識論を形成した時期は、正に、偶然的事象をも対象とする統計学が勃興する、いわゆる第二次科学革命と呼びなわされる時期にあたっていた。クールノーの確率の哲学の独自性を明らかにするためには、この時代背景の中で彼の哲学を素描する方法が有効であった。

## 4. 研究成果

本研究は 19 世紀フランスにおいて、帝政期から第三共和制成立までの時代を生きたオーギュスタン・クールノーの特に科学認識論に焦点をあててその全体像を描き出すことを一つの目的とする研究であった。これらの一連の研究の中では、以下の点が明らかになったと考えられる。

(1) 本研究においては、まずクールノーの学問論を、彼と同様に、数学、物理学、生物

学、社会学などの実証的学問全体を体系的に関連付けて理解しようとするオーギュスト・コントの学問論と比較した。その結果明らかとなったのは、ある種の現象主義を前面に出すコントの実証主義と比較したとき、合理主義的な実在論を前面に打ち出すクールノー哲学の特質が明らかになる。すなわち、自然法則の実在性を言うことに対して禁欲的（ないし攻撃的）なコントに対して、クールノーはある種楽観的といつてよいほどに、世界の合理性に対して信頼を寄せており、かつこの信頼が科学研究を進めるための動機ともなっているのである。またこのことは同時に、社会的現象への数学的手法を、少なくとも動機の上で正当化するものでもあったと考えられる。

(2) この点を明らかにした上で、学問の階梯という視点からクールノーならびにコントの学問を比較すると明らかになるのは、「複雑さ」という視点から見たときどの学問が最も複雑であるのか、を巡る両者の考えの違いである。すなわちコントは学問を体系的に並べた場合、「社会学」が最も複雑になると考えるが、他方でクールノーは生物学が最も複雑であると考え。即ちコントは学問の扱う現象の規模が拡大することがそのまま複雑さの増大であると見なされているのに対して、クールノーは、扱う現象が増大していくとある種の単純さを獲得していくと考えているのである。こうした学問観こそが、結果的に、社会的諸学、わけでも経済学に対して数学を積極的に適用していくクールノーの姿勢に繋がっているとも考えられる（もちろん逆の視点、つまり経済学への数理的手法の適用にしたからこそ彼の学問観が形成された、という解釈も成り立つ）。このことは、コントが生物学や社会学に数学を適用することを厳しく戒めた点から見ても、興味深いものとなっている。

(3) また、生物学の対象、即ち生命現象を最も複雑と考えるクールノーの発想は、彼自身の哲学に暗黙の形で内在する「生氣論」(vitalisme)を示唆するものであり、この生氣論の存在が、科学認識論者であるクールノーの立場を、複雑にしていると考えられる。もっともこうした複雑さのゆえに、クールノーの哲学はまた、フランス哲学における一種生氣論的な傾向のうちに自らを登録できたのである。本研究においてはこうした点もあき明らかになった。

(4) また本研究においては、同じくクールノーとコントの比較から、両者の偶然論の特質を明らかにした。すなわち、「偶然」という概念に人間的無知の反映を見て、偶然の実在性ならびに偶然を扱う確率論の学問性を否定するコントに対して、クールノーは、アリストテレス以来の伝統的な「因果系列の交錯」という偶然の定義を復活させて「偶然」の実在性を主張しつつ、同時に「組み合わせ論」との接合によって、この偶然を数学的に扱う手法をクールノーは開発し、また哲学的に正当化するのである。この結果、偶然の概念を強固に否定することで結果的に統計的手法などを自らの学問論に導入することができなかったコントと比べたとき、「偶然」の概念を洗練し、またそのことで、当時興隆しつつあった統計学的手法を自らの学問論のうちに統合することに成功したクールノーの手法が際立つものとなる。

(5) また、こうしたクールノーの偶然論は、彼の歴史哲学や社会哲学をも独特のものとしている。すなわち彼は、一方で決定論的な社会法則の探求は拒否し、歴史や社会における偶然的な事象の存在を認めるのだが、他方でその認識論前提のゆえに、社会的現象の数学化可能性をも認めるのである。こうした二つの視点の交錯が、クールノーの社会哲学を独特のものとしていることが明らかになった。

(6) また当該研究期間において、研究代表者は中央公論新社より公刊された『哲学の歴史』シリーズの第6巻に執筆する機会を得、フランス革命期に人間の認識能力を総覧することによって人間的知識の全体像を描き出そうとした、デステュット・ド・トラシーやカバニスといった、いわゆるイデオロジストの事績をまとめ、またフランスのスピリチュアリストの祖でありつつ、同時に生理学と哲学との関係に一定のモデルケースを残したともいえるメヌ・ド・ピランについてその全体像を描き出す機会を与えられた。その成果は、同シリーズ第6巻に「観念学とその周辺」ならびに「メヌ・ド・ピラン」としてまとめられた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

①村松正隆、「クールノーの確率論」、『創文』、

査読無、No. 508、2008年、6～9頁

② Masataka Muramatsu, “La logique d’objection contre la mort cérébrale au Japon –Objection nationaliste ou objection universelle?”, 『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』、査読無、第5号、2007年、107～116頁

〔学会発表〕（計 0件）

〔図書〕（計 3件）

- ① 村松正隆、慶應義塾大学出版会、『エピステモロジーの現在』（金森修編）、2008年、59～92頁（『偶然の確率を計算するークールノーの確率論』を執筆）
- ② 村松正隆、中央公論新社、『哲学の歴史 第6巻 知識・経験・啓蒙』（松永澄夫編）、2007年、571～643頁（「観念学とその周辺」「メーヌ・ド・ビラン」の2項目を執筆）
- ③ 村松正隆、東信堂、『〈現われ〉とその秩序ーメーヌ・ド・ビラン研究』、2007年、262頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村松 正隆 (MURAMATSU MASATAKA)  
北海道大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：70348168

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし